会　議　記　録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第５回高松市創造都市推進懇談会（Ｕ４０／第４期）
開催日時	令和元年８月２８日(水)　18 時 35 分～20 時 15 分
開催場所	高松市役所３階　３２会議室
議　　題	（１）事業アイデアについての発表 （２）第２次高松市創造都市推進ビジョン策定後の取組状況について
公開の区分	■　公開　　□　一部公開　　□　非公開
上記理由	
出席委員	穴吹副会長、中村かおり副会長、大石委員、大崎委員、大美委員、桑村委員、笹川委員、瑞田委員、中村香菜子委員、西谷委員、若林委員
市職員	小瀧、長谷川、森、武田、田村、三谷、杉原
関係課	政策課ユニバーサルデザイン推進室、観光交流課、観光交流課都市交流室、文化財課、スポーツ振興課、美術館美術課
市役所聴講者	１４人
事務局	大西市長、加藤副市長、田村副市長、長井局長、多田参事、田井部長、西岡課長、松本主幹、三浦係長、松下
傍聴者	２人　　（定員　５　人）
担当課及び連絡先	産業振興課　創造産業係 ８３９－２４１１

審議経過及び審議結果

１　開会
（事務局から欠席委員について報告）

２　議題（１）事業アイデアについての発表

【副会長】
本日は、「第４期Ｕ４０の事業アイデアについての発表」と「第２次高松市創造都市推進ビジョンの進行管理」の２つの議題を進める予定です。第４期は、２月の初めに第３期の事業報告とともに始まり、それから４回の会合を重ね、各メンバーのアイデアを出し合い、６つに厳選されたアイデアを今回発表させていただきますので、是非、楽しんで聞いていただけたらと思います。プレゼンテーションは、それぞれ１人１０分程度の持ち時間で、１０分が経過すると、合図として鐘を鳴らさせていただきます。その後、５分程度、質疑応答の時間を取りますので、皆さんから御質問をいただけたらと思います。なお、全プレゼンテーションが終わりましたら、市長や関係課の方

は退室いただいて構いません。

それでは、早速ですが、最初の発表をお願いしたいと思います。

【委員】

それではよろしくお願いします。それでは、始める前に私が御提案させていただくのは、「ことばのバリアフリー」というタイトルで、副題として「やさしい日本語の活用」とさせていただいていますが、皆さん、やさしい日本語という言葉を聞かれた方はいらっしゃいますか。結構いらっしゃるのですね。それでは、市役所の中や業務の中で、やさしい日本語を実際に使われた経験のある方はいらっしゃいますか。数名いらっしゃいますね。どのような場所で使われましたか。

【市役所聴講者】

窓口で外国人の方と話した際に使いました。

【市役所聴講者】

業務で、日本語が少しお話される方に使用しました。

【委員】

ありがとうございます。御存知の方がとても多かったので、お話がスムーズにできるかなと思っています。順番は前後しますが、私がこの「ことばのバリアフリー」を提案させていただく背景を御説明いたします。私個人はインドネシア語が少しできまして、インドネシア語の通訳及び高松市に在住するインドネシアの方、多くは技能実習生に対して支援を行っています。その中で、少し日本語ができる方に対しての支援、インドネシア語は少数言語なのですが、英語はなかなか通じません。その中でどういうふうにコミュニケーションを取って、生活のサポートをしていくかというところで、このやさしい日本語というところで興味を持ち、皆さんにも知ってもらいたいということで、今回、御提案させていただきます。今回の提案内容としては、日本語を共通言語と捉え、様々なシーンでやさしい日本語を有効活用し、情報提供、外国の人とのコミュニケーションを図ることで、誰もが住みたい、安心して住める高松市を目指すというものです。やさし日本語の定義としては、簡単な表現を用いる。文の構造を簡単にする、漢字にふりがなを振るなどして、日本語に不慣れな外国人にも分かりやすくした日本語のことを指します。固くしゃべったとしても、なかなかイメージが湧かないと思いま

すが、例えば、「御記入ください」はやさしい日本語で何というでしょうか。ありがとうございます。「書いてください」ですね。丁寧に言ったつもりでも、日本語に不慣れな外国人に対しては、逆に伝わりづらく混乱を招きます。この「書いてください」という一言が出てくれば、英語ができなくても、その方の母国語ができなくてもコミュニケーションを取ることができる、そのツールがやさしい日本語でございます。参考サイトとして、ＮＨＫオンラインの「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ　ＥＡＳＹ」でやさしい日本語を使ったニュースを発信しております。とても分かりやすいサイトですので、是非、ご覧いただけたらと思います。例えば、熱中症の話であれば、「熱中症に気を付けて」と漢字で表記した上で、読み仮名を振っています。なおかつ、熱中症という言葉が分からない人に対して、「暑くてめまいがします」といったような簡単な説明を加える記載があります。是非、ご覧ください。

　では、やさしい日本語を使って、どのような具体的な内容をやっていくかというと、ここにいる皆さんは知ってくださっていましたが、知っているけどもやさしい日本語をどうやって使うのか、実際にどういうふうに使っていったらいいのかというところが分からない方や、やさしい日本語を知らない方もいらっしゃるので、まず、市の各課の中で基礎知識や活用方法の研修を行っていけばどうかと考えております。全員はなかなか難しいので各課の担当に向けて、研修をさせていただいたのち、その方が中心となって各課内での研修を行っていくようになります。そこから、各課のニーズに応じたやさしい日本語の活用ということで、例えば、市民課でしたら住民票の登録の時のことばをやさしい日本語にする必要があるかと考えます。例えば、福祉課であれば、福祉にかかわる専門用語等をやさしく説明していくことを求められると思います。ここを各課がニーズに応じた外国人の方が使うであろうものを、専門家の方がやさしい日本語にするということが重要だと思います。次の３番では、全体での情報共有とツールの主役ということで、２番で出来た専門的な高度な性能を持ったデータをやさしい日本語にしたものをその課だけで持っておくのではなくて、全体で、全課で共有をするということで、横のつながりができるようになります。そうすることで、外国の方が市役所の方に来て、一番、困ることが、どこに行ったらいいのかが分からない。よくある部署として国際交流課があり、国際とついているのでここに行けばどうにかなるだろうと思っていくのだけども、そこで対応できる案件ではなく、違うところに行くのだけれどもまたそこでも違う、というような事例がよく起こっているので、情報の共有をすることで、それが防げて、誰もがどこに行けばいい、何の支援を受けられるといったようなことが、すぐに分かるシステム作りができる

のではないかと考えています。１番・２番・３番ができるのがベストなのですが、まずは知っていただくということで、具体的には研修を行っていく予定にしております。

流れとしては、都市交流室という部署が、通訳支援ということを業務にされているということで手を挙げていただいて、是非、このやさしい日本語を伝えていきたいということをおっしゃっていただいたので、まず、都市交流室からやさしい日本語の紹介、基礎知識、活用方法などノウハウ提供ということを各部署にしていただいて、そこから、各課でそれを使う場所はどこなのだろうとお考えいただこうと思います。そして、そのツールを全員で共有するということになります。効果としては、周知、ノウハウを生かした現場で使えるツールや先ほど申しあげたようなものが考えられます。以上です。

【副会長】

それでは質問等ありましたら、挙手をお願いいたします。

【市長】

あくまで、これは外国人向けということなのでしょうけれども、例えば、高齢者でも、なかなか、役所言葉を使うと分かりにくいというのはあるので、基本的にはできるだけ、やさしい日本語で徹底してやりますよということをやった方がいいと思うのですがそれについてはどうですか。

【委員】

そのとおりだと思います。このやさしい日本語は、私が最初に外国人に対してなんですけども、もちろん、小さいお子さんや高齢者、あとは障がい者の方にも使えるユニバーサルデザインにもつながっていくと思いますので、是非、各課で取り入れていただければと思います。

【副会長】

先ほど御紹介のありました「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ　ＥＡＳＹ」の説明を見ていると、外国人や小学生・中学生の方のために分かりやすい言葉で伝えるウェブサイトです、とも書いていますね。

他に御質問がないようなので、次の提案に進みたいと思います。

【委員】

よろしくお願いいたします。私の方で提案させていただくのが、「中高生発もっと高松プロジェクト」ということで名前をつけさせていただきました。どんなことをするかと言いますと、今、写している図は、第２次高松市創造都市推進ビジョンから抜粋しまして、丸で囲んでいるあたりのことをお話すると思って聞いていただければと思います。私が注目しているのは子どもです。といっても生まれたばかりの乳幼児ではなくて、ある程度、自分のことを表現できる中学生や高校生ぐらいの子どもを対象とした事業を進めていきたいと思います。じゃあ、彼らに対して何をしたいのか、彼らと何がしたいのか。高松のことを好きだという気持ちをもっと中高生に持ってもらえるような、ちょっと夢のある楽しい事業が出来たら良いなと思っています。それをするに当たって、どんなことができるか、どんなふうに楽しみながらできるか考えたのですけど、観光ガイドとか、今、高松外からのお客さんがたくさん来られていますので、そういう方々と一緒に何か出来ることがないかというところで考えてみました。あくまでも、目的は高松が好きだという若者の気持ちを育てたいということだと、最初にお伝えしておきたいと思います。この後、ガイドの話もするのですけど、観光ガイドを育成することを私はこの事業で目的とはしていないので、そこだけ御理解いただきたいと思います。

やることとしては、自分が暮らしているまちのことをもっともっと知ってほしいなと思っています。なぜ、私がこんなに中高生にこだわるのかなと思ったときに、一番大きな理由は、自分が子育ての世代なのかなと思っています。自分の子どももそうなのですけど、その周りの友達や家族と話をしているときに、もっというと進路を選ぶときに、「高松は仕事もないし、そんなに楽しいこともないし外に行って頑張れ」といったそんな話を結構耳にします。そういうのを聴くと、やっぱり辛い気持ちになります。一回は外に出てもいいと思いますが、一度出ても帰って来られる場所として、この高松という生まれ育った場所のことを心のどこかでちょっと誇らしく思うことや、良いまちだなとか、そんなふうに思ってほしいなと思ったのがきっかけです。

じゃあそのために、どんなことをしたらいいかなと考えたときに、まず高松のことを知ってほしい。知ればきっと好きになれるきっかけが生まれるのではないかと思いました。でも、調べるだけだと全然楽しくないし、学校の授業と何が違うのですかという話になってくるので、それは面白くない。やっていて面白くないことは、私も提案しづらいし一緒にやろうと言い辛いです。じゃあ、その学んだことを、どこかアウトプットできるような場がちょっと楽しみになればどうだろうというのが、さっき少しお話した観光ガイドにつながるところです。図のよ

うな感じで、高松のことを調べる、外から来られる人、観光に来られる人に話をする、話をすると外から来た人は喜んでくれるのではないか。でも、ひょっとしたらそこで答えられないことも出て来てもっと調べないと駄目だ、もっと知りたいなと好奇心が生まれるといいなと思います。それをまた今度、ガイドに生かすことで、また喜んでもらえたら、そういう経験は、子どもたちの素地というか良い経験になるのではないかと思いました。

そういうことをざっくり提案させていただいたところ、観光交流課の方から、実はこういうことをやっていますという御紹介をいただいたのが、「高松外国人観光お助け隊」という、この水色のジャンバーを着た大学生の皆さんが活動されているというお話をお伺いしました。主なメンバーは、香川大学、高松大学、徳島文理大学の学生さんが来ているそうで、面白そうだと思ったので、私、一緒に活動させてもらって、参加している大学生に話を聞いてみました。私として一番興味があったのは、なんでこの活動に参加しようと思ったのですかというところがすごく興味があったので、いろいろと聞いてみたのですけども、観光の仕事に就きたいだとか将来に生かしたいという学生さんも多かったのですが、「高松や香川ってええとこやでってもっと友達にも知ってほしいのです」と、「外に出て帰ってこないと言っている友達が多くて」って話を聞いて、そんなことを考えながらこういう活動をしている大学生がいるのだと思うと、私はとてもウキウキしたのですが、ちょっと乗っかりたいなと思いまして、少しですが一緒に活動するようになりました。彼らの活動内容としては、お助け隊なのでまさにガイドなわけですが、すごく頑張っています。そのために必要な情報を事前収集したりだとか、そういうことも頑張って活動してくれています。今までの主な活動としては、高松駅周辺のガイド活動だとか７月にあったトライアスロンの対応だとかクルーズ船の御客様の対応、その対応に向けた事前の情報収集活動を一生懸命されています。良かったら、フェイスブックのページがあるので「いいね！」を押してあげると大学生が喜ぶと思います。

そういう彼らと出来ることを一緒に、できる範囲で一緒に活動出来たら良いなと思っています。ただ、最初にお伝えさせていただいたように、元々の目的がちょっと違うので、ずうっと一緒にできるかというとそうではないと思うのですけども、外に出て一緒にガイド活動をしたりだとか、事前の情報収集をしたりだとかそういうのは中高生と大学生、多少は世代の差もありますし、面白いのかなあと思って一緒に活動させてもらっています。

やることとしては、今年度中ぐらいに高松市内で、中学生はいまいちもう一歩が出ないのですが、市内の高校生ぐらいを対象に、試しにまちに出て観光客と話

をしてみる。外の人と話をしてみるというところから始められたらいいかなと思っています。

そう思っていたら絶好の機会がやってきまして、先日、ダイヤモンドプリンセスが高松に初寄港して、記載していますが乗客が２７００人ぐらいです。そこに乗っかってみようと、せっかくなので高校生を連れてまちに出てみました。

ダイヤモンドプリンセスがどれだけ大きいかを資料にしてみましたが、飛鳥Ⅱが入るところにこの船をつけようとすると船底が擦ってしまうらしいです。

そんなわけで、かなりたくさんの観光客の方が、商店街に来ていてお買物されたり観光されたりしていて、そこにこの水色の枠で囲っているのが高校生７人なのですけども、向かって右側のＴシャツ来ているのがお助け隊の人たちで、一緒に活動させてもらいました。高校生も個別に声をかけてみると参加動機もいろいろだったのですが、英語が好きだとか、外国人と話す機会があまりないので良い機会だと思ってきたとか、中には友達を複数人連れてきたというようなパワーのある高校生もいました。その中で私が注目したいのは「高松のことをもっと知りたいんです。自分が生まれてきたまちなのに意外と知らないなということを最近感じまして。」と言ってくれた高校生も含めて活動しました。

高校生にお願いしたのは、初めてのことだったので、とにかく笑顔でお客様におもてなしの気持ちを伝えること、もう一つは、質問されたことを後で必ずみんなで共有しようということだけをお願いしてまちに出ました。すると、こんなふうに外国人の方にいろいろと聞かれたと報告を受けました。「お寿司が食べたいんだけど」、「和傘を売っているお店はありますか」、「アップルストアはないですか」とか、一番面白かったのは「一緒に写真撮って」って言われたことでした。

なんでこういう経験をしてほしかったかというと、きっと彼女たちは初めてのガイドなので、伝えられなかったことがたくさんあったと言っていました。お寿司屋さんもあるのは分かるけど、今この近くはどこだろうとか、和傘も普段自分たちは傘をコンビニでしか買わないからどこにあるか分からない、そういうことが興味につながると良いなと思います。多分、彼女たちは、例えば、うどん屋に行ったときには、この前発送できるうどん屋さんないですかと言われたので、うどん屋に入って、県外発送できるところはないのかなと見ながら行くと思うのですね。和傘も、何も感じないで商店街を歩いていたら何も思わないけど、「この店なら和傘が置いてあるかも」ともしかしたら引っかかるかもしれません。そういうことの積み重ねによって、興味が好きに変わってくれればいいなと思いました。

そんな気持ちが育つと高松に住みたいだとか、進学・就職してもいつか帰ってきたいなと思ったり、そういう若者が増えると、すごく楽しいまちになるのではないかと思っています。他にも、もっとコミュニケーション力の向上につながったり、社会貢献活動の理解につながったり、観光産業の担い手の育成につながったり、そういう美味しいこともあるのではないかとも思っています。そういうことで、こういったガイド活動プラスそれを調べるという事前の活動を通して、子どもたちと一緒に、こういう活動を通して高松を好きだという気持ちを一緒に育てていけるような楽しい事業が出来たら良いと思っています。以上です。

【副会長】
ありがとうございました。それでは質問のある方は、挙手をお願いします。

【市役所Ｕ４０】
高校生が実際に参加してみて、一番多かった感想は何だったのでしょうか。

【委員】
私もそこは興味があったので結構しつこく聞いたのですが、一番、最初に返ってきた答えは「楽しかった」というものでした。「あっという間の時間だった」、あと「次もう一回参加したい」という気持ちも聞かせていただきましたし、もっと突っ込んだところでいうと、「そんなこと聞かれるんだ」ということを意外と聞かれたようでした。彼女たちにとって、高松に来てまで、アップルストアやスターバックスの場所を聞かれることがすごく不思議だったようです。「自分が予想で思っていたものと実際にやってみたら違うこともあるんだな」ということも感じたようでした。

【委員】
私も改めて高松のことを知らないと思いながら聞いていたのですが、具体的には、高松のまちをみんなでフィールドワークするといった事業も含まれているのでしょうか。

【委員】
良い質問ありがとうございます。高松をフィールドワークするそういうこともできたら良いなと思っています。多分、こういう経験を重ねていくとハテナがいっぱい増えていくと思うのですよね。なので、それを日常生活の中で一つずつ解

決していくということが一つだし、一旦、みんなでちょっと集まって、ちょっと勉強しに行こうかということもあってもいいのではないかと思っています。

【市長】
　これは事業として、どういう形で続けていったらいいかと思われますか。今は観光お助け隊にチャレンジされているわけですが、どういう形の事業で継続していこうという何かお考えはありますか。

【委員】
　ありがとうございます。私の個人的な想いでお答えさせていただくならば、例えばこういう小さい走り出しで、ある程度、効果が見込まれるのであれば、こういう効果があるということを分かってくださるところがあるのであれば、最終、授業の時間の中でやれたりだとか、学校の教育の現場で継続してやっていただけるのであれば嬉しいと、個人的には思っています。やる気のあるないももちろんあるのですが、こういうことをやってもなかなか知らない子どもたちもたくさんいるので、そうなると、学校というある程度みんなが足を運ぶ場所でこういうことを一緒にやれたらいいのかなということはうっすらと思っています。

【副会長】
　他に質問のある方はいらっしゃいますか。ないようなので、次の提案に進みたいと思います。

【委員】
　それでは御説明させていただきます。まずは今回、オリンピック観戦チケットの申込をした人はどれぐらいいますか。購入した人はどれぐらいいますか。それでは、申し込んだけど外れてしまった人はどれぐらいいますか。結構外れているのですね。それでは、今、パラリンピック観戦チケットの申込が始まっているのですが、申込をした人はどれぐらいいますか。もう、来年に迫ったオリンピックとパラリンピックなのですが、今お聞きした感じのように「正直、東京の話じゃん」と思われている方は多いのではないでしょうか。あと、今年の９月に大イベントがあることを知っている方はいますか。ラグビーワールドカップですね。皆さん、少し感じていると思うのですが、ラグビーワールドカップは中・四国エリアで会場がゼロです。全然、ニュースとかでも見ない。東京だと駅の広告だとかで目に見る機会がありますし、キャッチコピーも「４年に一度じゃない。一生に

一度だ。」というかっこいいものもあります。今回、皆さんの中でも、遠いもののように感じられているだろう東京オリンピック・パラリンピックの特にパラリンピックは、私自身も遠いもののように感じていて、どうしたら皆さんにとって身近になるかというよりも、実は既に皆さんの身近にあるのですよということをこの部分でお伝えする形で提案させていただければと思います。

高松は台湾の陸上選手のホストタウンになっています。２０１８年の９月には「第２９回日本パラ陸上競技選手権大会」で、今年の６月には「中国・四国パラ陸上競技大会」ということで、パラに力を入れているのが今の高松です。香川からは、２０２０年のパラリンピックには、現在、５名の選手が候補になっています。

じゃあ今、高松だけではなくて県外でもどういうふうに関わっているかというと、先ほどの５名というのが、やり投げの田中選手、車いすフェンシングの阿部選手、水泳はまんのう町の方、カヌーは坂出市の方、卓球の三豊市の方で５人もいらっしゃいます。県内のホストタウンも、私たち高松市民は台湾だけかと思いきや、なんと、坂出市はハンガリーカヌー、丸亀市はクロアチア陸上ということで、県内でもこのぐらいホストタウンがあるのですね。今、知ったという方もいらっしゃるのではないでしょうか。こういう形で、香川県というのは関わっていて、東京の競技ではないということを少しずつ認識していただければなと。

じゃあ、皆さんの心に思っていることを私が代弁して、この図からお伝えすると、「なぜ身近じゃないのか」というところなのですけど、関心がある人は多いのですけど、関心がない理由のベスト３を引用してみました。第１位が「身近に障がい者スポーツにかかわっている人がいないから」で、これは一番大きいですよね。Ｕ４０の第３期は、パラを推していたのは、委員の中に選手がいたということがとても大きかったと思うのですよね。オリンピックに出るかもしれないという選手が身近にいたということは、すごく大きな影響だと思います。続いて第２位が、「どんな選手がいるか知らない」。これもすごく大きなことで、先ほど５人の選手を紹介したので、皆さんは５人の選手を知ったということにしたいと思います。第３位は、「どんな競技があるか知らない」。これはすごく大きくて、前回の第３期の時に、パラのボランティアをしようとなったときに、やっぱりこれがすごく大きかったので、みんなでパラにはどんな競技があってどんな選手がいるのかということをみんなで勉強したりとか、あとは、選手に来てもらって、どんな選手が出ていてどんなふうにやっているのかというのを説明したりしました。やっぱり、こういうことがすごく大きい。関心がある人はたくさんいるのに、選手のことや競技を理解すれば、もっと興味が深まるのではないかなとい

うのが、皆さんにとってオリパラがぐっと身近になるポイントではないかと思います。

それで「こうしてみよう」というところの提案なのですけども、まずは広くいろいろな人に伝えたいというところで、広報たかまつを活用してパラリンピックの紹介をしていければいいのではないかというのを考えました。パラアスリートや競技を紹介することで理解を深めること、例えば、ただ、選手を紹介するだけではなくて、その選手はいつもどこで練習しているのか、練習した後、高松市内のどこの御飯屋さんで食べているのか、御飯屋さんの人から「その選手はいつも○○を食べている」ということを聞くと、私たちにとっても身近に感じるのではないでしょうか。絶対に、今、言ったようにしてくださいということではないですが、そういうことをより身近に感じてもらえることで、選手のことを理解してもらう。あとは、パラリンピックまでに連載してみたりだとか、例えば、広報紙って、今、じゃあ５月の広報紙取って置いているかというと、もう新聞屋に出しちゃったりとかすると思うのですけど、それをちゃんと後からも使えるツールとして、これに載っているのでぜひ使ってくださいと、色んなところで見たり活用していくことで、ツールとしても使えるのではないかなというふうに御提案させていただきます。

一番大事なのは、作りました、できました、配布しました、以上です。ではなくて、その次のアクション、持った人にこうしてほしいというのが一番大事。３つあるのですが、まずはとにかく「パラリンピック見てくださいね」というところがそうですね。見て、応援して、それから体感してほしいです。２番目は、「選手を通して競技を身近に感じてほしい」。是非、地元から出場している選手を全力で応援してください。もう広報誌を見て、どんな選手がいるか、ここに今いる方は香川県から５人の候補がいるということを知ってしまったので、もう関係者ですね。もう自分も関わっている関係者であることを意識していただけたらと思います。一番大事なのは、３番目の「「おもしろかった」から「おもしろいよ」」です。是非、それを見て面白かったり、興味を持ったり、関心を持ったら友達や家族に「面白かったんだよ」というのを是非、発信していってほしいなと思います。是非、関係者なので、その気持ちになって、いろいろ自分が「面白かった」だけでなくて「これ面白いんだよ」とそういうふうなものにしてほしいなと思っています。私は第３期の時に、「ＣＡＮ　ＭＡＰ」というマップを作らせていただきました。その時に、スポーツ振興課さんと一緒にやらせていただいて、ボランティアプログラムの時は、障がい福祉課さんとも横断してやらせていただきました。今、Ｕ４０の下でいろいろとやらせていただいたのですが、役所

の中のことは、御存知ですし、部署を横断するのはすごく大変なことで、逆にすごくご迷惑をおかけしたと思うのですが、そこの中でいいものもできるというのが体験させていただきました。その中でもっと可能性があったりとか、もっと横断したらもっとこういう新しい層にアプローチできるのではないかというのをすごく分かったので、例えば、広聴広報課とスポーツ振興課と一緒にやることで、新しく見てくれる人が新しい気持ちになって紹介してもらえるということがすごく大きなことだと思うので、是非、こういう提案ができればと思います。

最後に一つだけお話させていただきたいと思うのですが、少し前に市の別の会議にも出席させていただいたのですが、これからは人口減少だという話をしていて、減るのはしょうがないと思いますが、減っていく中で、民間として市として一緒に出来ることをどこまで挑戦していくかということが、すごく大事なのではないかというのを、最近、すごく思っていて、市役所で出来ることと私たちが出来ることはすごく大きな差があると思うので、ある程度、私たちが牽引しながら、一緒に活動していったり、提案していったりするのはすごく大事な機会ではないかと思っています。なので、Ｕ４０でこのような機会を与えていただいたことを大変感謝しておりますので、今後ともよろしくお願いできればと思います。

【副会長】

ありがとうございました。それでは質問のある方は、挙手をお願いします。

【副市長】

プレゼンいただいた中で、「最後に手に取っていただいた人にしてほしいアクション」とありましたが、例えば、何かＰＲする媒体で伝えるに当たって、アクションにつなげるために、例えば、パラリンピックの何をどういうふうにコンテンツとしてまとめたらいいか教えていただけますか。

【委員】

ありがとうございます。これを必ずやるというわけではないですが、やはり関係者を増やすことなので、例えば、パラリンピックの競技とか人を説明しないといけないと思うのです。ただ、その掲載をする中で、関係者を増やしていければと思うのですね。例えば、４回連続連載するとなったときに、いつもだったら文章だけ書いてある。そうではなくて、例えば、今回のナビゲーターはＵ４０の○○さんです。○○さんが調べて写真を入れながら、「ああこういう形でやっているんですね」というものをインタビューしていたら、ただ掲載するよりは、○○

さんが「私がインタビューしたので、是非、見てください」と発信することで関わっている人がどんどん自分事にして発生していくと思うので、そういう形で誰かが決めて載せるのではなくて、どういう人が関わって、こうやっているのかというように、市民に顔を見せていくというのがいいのではないかと思っています。

【副市長】
　要するに、広報たかまつを活用してという話だと思うのですが、広報たかまつだけでは、なかなかアクションまでつながらないと思うので、何か違う仕掛けも必要なのではないかと思うのです。例えば、パラ陸上の合宿が日本であるので、実際に、近くで一緒に、間近で見て交流すると全く違うと思うので、そういったいろいろなイベント系の仕掛けはどうでしょうか。

【委員】
　いろいろ次第だと思います。ただ、実際に配るだけということは難しいと思うので、例えば、アクションを起こしてくれそうな人のところに配るというのが一案だと思うのですよね。ただ読むよりも興味のありそうな人のところに撒いていくのも一案だと思うので、例えばそういうイベントを見つけて配っていくとか、それこそ前回「ＣＡＮ　ＭＡＰ」という良い素材を使っているので、それと併せて配っていくというのもアイデアの一つかと思っています。

【副会長】
　他に質問のある方はいらっしゃいますか。ないようなので、次の提案に進みたいと思います。

【委員】
　よろしくお願いします。私は工芸を中心とした御提案をさせていただけたらと思っていまして、私は前回もＵ４０のメンバーだったのですが、その中で「たかまつ工芸ウィーク」というものを昨年度行いました。それで私もお手伝いさせていただいたのですが、来られた御客様の多くは県外の御客様で、やはり地元の方の感触があまりなかったなあと見ていて思いました。その中で地元の中にも、手軽に敷居が低いような感じで、何か提案ができないかと思い、今回、このような提案をしているのですが、今年も工芸ウィークが開催されるということもありまして、それと関連付けられたらとも思っています。

趣旨としましては、まず、工芸と島の食という形で、実際、今年度やりたかったのですが、今年は芸術祭の年ということもあって、なかなか島の食が手に入らなく、私も大島でカフェをやっているのですが、もう、秋会期に提供できる島の食がなくなっているという状態なので、今年度は難しいのではないかと思っています。この島の食というものは、来年度にたかまつ工芸ウィークがもしあれば、そういったところで関連できたらと思っています。大きな主旨としては、高松の伝統的工芸品を観光資源として広め、体感する。今年は瀬戸内国際芸術祭の年でもありますので、観光客、特に地元の方には、知ってもらえるようなことができたらと思っています。工芸品というのは、やはり敷居が高いというイメージが皆さん持たれているということもあって、手の届かないというイメージも持たれています。少しでもそういった敷居が下がるように、器や箸、カップなどの伝統的工芸品で楽しんでもらえるような仕掛けができないかと思っています。もう一つは、伝統的工芸品の広報物なのですが、これは高松の伝統工芸士さん、あと伝統工芸品がいろいろとあると思うのですが、そういったモノや関わっている人を紹介しイメージアップを図れたらと思って提案しております。

その大きな主旨の中で、具体的にどういったことができるかと考えていったときに、伝統的工芸品を使った器、箸、カップなどを使える場所を提供できないかと思っています。芸術祭の舞台となっている大島や男木島では、レストランやカフェがあるのですが、そういったところでドリンクや料理を提供する際に、漆器を利用できないかと思っています。やはり、実際に手に取ってみて、使っていただくと、手軽に自然な形で触れることになりますので、そこから知っていただけるのではないかと思っています。ですが、その食材が芸術祭と重なっていて、こちらは来年度に向けて検討したいなと思っています。伝統的工芸品の広報物づくりでは、前回のＵ４０の中で、なかなか予算をつけることが難しいということがありましたので、昨年度、「たかまつ工芸ウィーク」の中でインスタグラムのアカウントを作りました。その中で伝統的工芸品についての発信であったり、工芸ウィークのイベントの発信も行ってはいたのですが、そのインスタグラムを高松市のホームページにある高松市伝統的ものづくりのページと連携して情報発信ができないかと思っています。本当は、各伝統的工芸品の紹介やものづくりをしている方々の紹介とかを写真もインタビュー内容もちゃんとした形のものが出来たらと思っていたのですが、そちらが難しそうだったので、まずはこういった形で、ＳＮＳで発信できるよう、そしてそれを高松市さんのＷｅｂと連携できないかと思って、まずはこういった御提案をしております。

実施効果としましては、まずは身近なところで自然な形で手に触れられるよう

な事業内容を考えておりますので、そういったところで高松の伝統工芸品を知ってもらう。そして「たかまつ工芸ウィーク」の期間が１０月にあるのですが、そちらの中で高松のお店さんが参加しております。そういったところで、伝統工芸品に出会うことができますので、そういったところへ誘導ができたらと思っています。また、先ほどの工芸ウィークのインスタグラムアカウントがありますので、ＳＮＳで県内外や若い世代への発信につなげられたらと思っております。そういったところで高松の魅力の再発見、例えば、庵治石から庵治という場所につながることやそういうことで高松の歴史や魅力の再発見につながるようなそういったところを効果として挙げております。今回、芸術祭では高松の北浜で、香川県の伝統工芸品をアートとして活用しているのですが、アートもそうなのですが、高松のそういった伝統工芸品のことを知れるとてもいい機会になっていると思いますので、身近に触れられるところから手に触れられたお客さまが高松のことを少しでも知ってもらえる機会が増えたらと思って提案をさせていただきました。以上です。

【副会長】
ありがとうございました。それでは質問のある方は、挙手をお願いします。

【市職員聴講者】
「島の食×工芸」と「伝統的工芸品の広報物づくり」の２つ御提案いただきましたが、後者の中で、確かに工芸品には敷居が高いというイメージがあり、その伝統的工芸品の紹介をしてイメージアップを図るということですが、実際にどのような情報があったら、例えば若い人に興味を持ってもらえるのかと思っておりますので、是非、そこのところのお考えをお伺いさせていただければと思います。

【委員】
今もホームページを見ていると、本当に工芸品の紹介が詳しく載っているという内容だったので、そこを日常生活の中で、紹介だけでなくて生活工芸ですね、器であったり、お箸であったり、そういった身近に感じられるような工芸品の紹介の仕方をすることで、もう少し身近に感じられるのではないかと思っています。あとは工芸品の紹介だけではなく、ものづくりを実際にされている方へのインタビューであったり、紹介というのがあった方がこういう職業があるのだなというのが、例えば、こういう職業を目指している若者もいると思いますので、そ

ういった紹介の仕方というものもあるのかなと思って、本当はそういったところをＷｅｂもそうなのですが、冊子ものにできればいいなと思っておりました。

【市長】
プレゼンの中で、漆器とか庵治石とかの紹介がありましたが、今、特に力を入れたい高松の伝統的工芸品というか、あるいは、もっと売り方というか見せ方を工夫したら上手くいくのになあというものなどで、何か具体的なものはありますか。

【委員】
盆栽なんかはすごく有名だと思うのですが、そうではない張子とか日常ではなかなか使わないような伝統的工芸品もいくつかあると思うのですが、例えばそれが御土産物になったりとか、そういった日常生活ではないところで、まだ脚光が浴びられていない伝統工芸品へのアプローチの仕方も工芸ウィークとかで提案ができたら良いなと思います。

【副市長】
少し教えていただきたいのですが、工芸と島の食というところで、器とか箸とかカップと、基本的にこれはもう漆器を想定しているということでよいでしょうか。

【委員】
はい。私は漆器を想定しています。

【副市長】
であれば、その漆器の周りに、のり染めや提灯といった他の工芸品を置くということもありなのでしょうか。

【委員】
例えば、庵治石を使った箸置きなんかもあると思いますので、そういったところは考えられるかなと思います。本当は芸術祭の年で、高松市さんの事業としては、女木島・男木島・大島を食と伝統的工芸品でつなげられるようなことができたらと思っておりました。

【創造都市推進局長】
本当に素晴らしいアイデアですぐに実施できるようなアイデアですが、御提案の中にもあったように漆器というものは敷居が高いと。その理由は制作している器が生活工芸ではなくて、アートに近いような作品となっているので値段も高いと思うのです。そこを工芸と島の食というようにつなげて、器、箸、カップといういわゆる普段使いできるような漆器というイメージなのですね。

【委員】
そうですね。昨年度の「たかまつ工芸ウィーク」でも身近に感じられるような日常生活で使えるような漆の販売もされていましたので、実際に使ってみてこういう手軽に使えるものなのだと触れてみて、作品として鑑賞するだけでなくて使えるものなのだなということを感じてもらいたいと思っています。

【創造都市推進局長】
ということは、今年の「たかまつ工芸ウィーク」は市が主催なのですが、工芸ウィークの発信のところで、そこでクローズアップして次につなげるときに、結構使えて値段も安いということが知れ渡って、次に島に行ったときに、例えば、来年度に行くと、島の食材が器に盛ってあるというように、つながっていくような仕掛けが必要ですよね。

【委員】
そうですね。できれば、今年度の「たかまつ工芸ウィーク」のときに、大島のカフェの中でドリンクなどを提供しているので、そこで漆器に触れてもらった御客様が、高松に戻ったときに伝統工芸品を取り扱っているお店に足を運んでいただいて、実際に購買等につながっていけばいいなと思っています。

【市長】
もう一つ良いですか。この工芸品を訴えかける相手方として、いろんな人を想定しているのでしょうが、まずは芸術祭に来られた人たちということで、その中で特に外国人に対して訴えかけるとか、そういう視点は考えられていますか。例えば、先ほども別の委員のお話にもありましたが、和傘は売っているところを知りたいとかですね、特にこの前テレビでやっていたのですが、日本に行って一番の御土産として、特定のお店で売上が高かったのが、「塗り箸」のようなのですね。まさに、漆器の箸が御土産として非常に人気がある。外国人に対して使用を

訴えかけるのだということで、外国人をターゲットにした取組というものが一つの視点としてあってもいいように思います。

【委員】
　まさしくそのとおりだと思います。私も去年の工芸ウィークで、やはり地元の方の関心度が低かったというのがあるので、そこから今回の提案をさせていただいたのですが、やはり高松は海外の御客様が非常に多いので、そういったところへのアプローチも必要かなと思いました。

【副会長】
　他に質問のある方はいらっしゃいますか。ないようなので、次の提案に進みたいと思います。

【委員】
　よろしくお願いします。私は美術館の学芸員をしておりますが、出身は文化財畑でございます。今回は一学芸員の企画ではございますが、少し御提案させていただこうと思います。早速ですが、タイトルが「文化施設×ソーシャルインクルージョン」としました。文化施設というと大体、皆さんの御推察のとおり、資料館、美術館、今回あえて図書館も入れてみました。皆さんは資料館というと「高松市歴史資料館」をイメージされるかと思いますが、市町村合併により、牟礼町にある「石の民俗資料館」や香南町、国分寺町にも資料館がございます。また、文学館として「菊池寛記念館」もありますし、考古学の遺物が見られる「埋蔵文化財センター」もございます。美術館は街中にあります「高松市美術館」が大きな企画をしていますが、小さいなりに良い企画をしている山奥にある「塩江美術館」もございます。私はそれぞれで何かしら勤務経験がございますので、少し中の事情も知りつつの企画になります。そして、ソーシャルインクルージョンということですが、以前の会議でも「ソーシャルインクルージョンの意味は何ですか。」と聞かれたりもして、慌てふためいてしまったのですが、日本語にすると「社会的包摂」という言葉になります。最初に謝ってしまうのですが、私がこの言葉に出会うのはまだ間もない初心者でございます。簡単に申しあげますと、「多様な人々を歓迎するミュージアムづくり」をしたいという御提案です。「多様な人々」ですが、皆さんはどのような方々をイメージされるでしょうか。それぞれの分野で思いつくものがあると思いますが、例えば、障がい者の方ですが、障がい者と一括りにいっても様々な障がいがあります。聴覚が不自由な方、視覚

が不自由な方、身体が不自由な方がいらっしゃいます。また、外国籍の大人やお子さん、最近は、日本語のちょっと苦手な外国籍の子どもたちも小学校や中学校にいると聞いています。また、御高齢者の方々、子どもたち、それからＬＧＢＴＱの方々を含めて「多様な人々」と括っております。

その人たちを歓迎するミュージアムづくりということで、私は年間５０館以上を個人的にめぐりつつ、研究会などにも参加しているので、今の動向や先進的な事例のいくつかは捉えているつもりです。ということで、ワークショップを御提案したり、展示方法の面白い方法やワークショップの中でも対話型鑑賞や福祉施設と協働企画する等々、アイデアとしてはたくさん出てくるのですが、なかなかこういうものは我々の専門分野と相手の専門分野がありますし、参加者も開催する側も安心と安全の確保がされないと難しい事業ばかりだと思います。そこで、知ることから始める活動を提案しています。具体的な内容は、職員研修です。

職員研修の内容としては、全国で実践している館の事例報告で、特化した美術館や博物館もあります。そういった事例を聞く場や、最新の研究動向、いわゆる学会や大学関係で研究されているものをその分野の専門家から話を聞くという機会を設けてみてはと思います。ネットで簡単に、文化施設、博物館、美術館、ソーシャルインクルージョンで検索すると、ご覧の画像が出てまいりました。ご覧のとおり、様々な活動が展開されています。私がこの企画を考え付いたのは、日本ミュージアム・マネージメント学会においてこの春、２回に渡って開催されたテーマがまさにこのテーマでありました。

習いたての言葉で提案させていただいているところですが、効果としては、まず、現場で勤めている専門員、スタッフの人材育成の一つになると考えています。現場に立っている高松市の職員は、おそらく非常勤嘱託職員の方が多いのではないかと思います。正規職員の方は、文化庁からの研修活動には参加できるかもしれませんが、現場の人が参加できる機会は、おそらく今でも少ないのではないかと思います。１人や２人が出席する出張費は確かに安くはありませんが、講演などの外部講師を招くお金で、２０人や３０人に対して研修を行うことは効率の面からも良いのではないかと考えています。また、前回のＵ４０で提案した「ＣＡＮ　ＭＡＰ」の活動継承の一つとして、外からいらっしゃったおもてなしの部分で、おそらく皆さん、うどんを食べた後に何か香川を知りたい高松を知りたい、そういう欲求を持たれるのではないかと思いますので、文化施設の側はこの知っているか知っていないかでその差がすごく出ると思います。その継承活動に文化施設もつながっていければと思っています。そして最後に、他分野との交流の機会です。最初に文化施設を挙げましたが、歴史、美術、図書館が全て単館

で、それぞれ持っている所蔵品やスタッフの交流は、仕事の中でしか、もしかしたらないかもしれませんが、これが新しい化学反応を生み出すものです。歴史や美術、図書館という輪の中でぐるぐると、知的欲求で調べたことを図書館に帰ってまた本物を見るというような循環型の体験ができればと思います。

この研修会で得られるものについて、少し御紹介します。車椅子の方に対して段差をなくすだとか、展示方法について目線を低くしたものに変えるなどの工夫をすると、おそらくバリアフリーということでベビーカーなどの車椅子の方以外にも良い効果が生まれると思います。他の委員のお話にもありましたが、少し言葉に障がいを持っているお子さんに対して、「やさしい日本語」で解説する。毎回、この展示だと大変かもしれませんが、そういう展覧会をすると、私たちは受け入れられている、歓迎されているという発信にもつながると思います。このやさしい日本語は、もちろん外国の方にも有効だと思います。それから、よく美術館にある対話型鑑賞は、コミュニケーションツールとして良いですし、言葉のキャッチボールの中で、皆さんに美術鑑賞をしていただくというものです。これは美術館では定番のものではありますが、もし、歴史などでも挑戦できれば面白いのではないかと思います。このように、それぞれの対象者の誰かのためにということが、みんなのためになっていくのではないか、その気付きの一歩として、まず知る機会、研修活動があればいいなと考えています。以上です。

【副会長】

ありがとうございました。それでは質問のある方は、挙手をお願いします。

【市役所Ｕ４０】

文化施設ということで、資料館と美術館と図書館で、以前に働かれているときに、実際に交流だったり一緒に展覧会を開いたりといったことはあったのでしょうか。

【委員】

それぞれの在職期間が短いという理由や、企画の決まっている段階で入社する場合もありましたので、展覧会などで交流する機会がもしかしたらあったかもしれないですが、なかなか他館との交流は難しかったと思います。この研修は、一方的に聴くだけでなく、あとでアウトプット、感想をシェアするワールドカフェという使われ方をすると思うのですが、そういう交流の機会に、ソーシャルインクルージョンについての知識を、一度、みんなで考えるとともに、今まで自分が

関わってきていない分野との架橋というものも少し提案できたらと思います。私自身も和田邦坊という画家を研究していますが、美術の視点だけで見ておりません。香川県の歴史や文化に関わる人物でもありますし、最近では、地質学の先生と連携して事業を考えていこうという考えが和田邦坊にはあります。一つの分野に特化するのも大事なのですが、少し世界を広げて、その世界を広げた分、受け入れる人が増えるのではないかと思います。

【副市長】

知ることから始める職員研修ということで御提案いただきましたが、内容については、どこまで求めるかによると思うのですが、研修をして一般的に対話型鑑賞ですとか、そういうものに対して職員の方は対応できるものなのか、それとも、知ってそこからさらに深く知識を学ばなければいけないものなのか、その辺りについて教えていただければと思います。

【委員】

あえて、具体的な事例は御紹介しなかったのですが、おそらく、それぞれの館の職員の人数は決まっています。決まっている業務内容もあるので、その館で持っているポテンシャルに合わせて、自分たちで擦り合わすということが研修後に求められるのではないかと思います。アウトプットした中で、自分にはできないけども、この人に頼めば少し協力者が増えるだとか、自分たちの館だったらこの辺りまではできるとか、全部の館が対話型鑑賞は難しいと思います。まず、こちらから提案するのは、擦り合わせの材料を皆さんに提案する研修活動と考えています。

【創造都市推進局参事】

３つ目の効果のところで、他分野との交流の機会にというところで、歴史、美術、図書館というつながりという面で大事なところだと思っています。現にサンクリスタルの中でも、１階に中央図書館があって、上の階に歴史、催し物によっては美術とのつながりもできると思うのですが、そのつながりという部分で、具体的にこういう仕掛けとか、そういうものが、もしお考えとしてあればお伺いしたいです。

【委員】

私は高松市の歴史資料館で勤めた経験がありませんので、もしかしたら既にあ

る事例かもしれませんが、例えば、図書館と連携して図書の貸出コーナーを作っていただいたり、図書館のお話会や朗読会で何か企画をしていただくとか、美術館と歴史でいうと、既に検索が可能かと思いますが、歴史資料だと思っていたものが美術作品として見られるかもしれない、美術作品だと思っていただけども歴史を語れる資料になるかもしれない、そういう情報の交換というものは人と人とのことでしかできない部分がこの世界あるかと思います。よく、モノの活用とあるのですが、この分野は人の活用が第一だと思っているので、その人の人材育成という部分もこの研修の大きな要ではないかと思っております。

【副会長】

他に御質問等はありませんか。なければ、議題（１）の最後に、市長から御講評をお願いしたいと思います。

【市長】

発表者の皆様、お疲れ様でございます。只今、それぞれ、５人の方から６つのテーマについてアイデアを発表いただきました。発表者の皆様、誠にありがとうございました。簡単ではございますが、私自身の思いや考え方を交えて、講評させていただきたいと思います。

まず、最初の「言葉のバリアフリー」ですが、やさしい日本語をしっかりと普及しようということでございます。先ほど、私も質問の中でお話したとおり、外国人の方が主な対象であると思いますが、やはり高齢者であるとか、障がいを持った方であるとか、あるいは子どもに対して、しっかりとコミュニケーションを図るためには、小難しい、いわゆる「役所言葉」を使っていたのではダメなので、やさしい日本語というものをしっかり普及していく、あるいは、高松市役所の窓口等については、やさしい日本語をベースにして市民の方に接するということをしっかりと職員の方に認識していただいて、そのための研修というものもしっかりとやっていくというふうに進めていければと思っています。そのことがいわゆる多文化共生社会の推進につながりますし、いわゆるユニバーサルデザインの推進にもつながるのではないかと思います。早速、取り入れさせていただいて取り組んでいきたいと思います。

それから「中高生発　もっと高松プロジェクト」のアイデアでございますが、実際に、ダイアモンドプリンセスが入港したときに高松外国人観光客お助け隊と一緒になって取り組んでみたときに、高校生の意識啓発というものに効果があったというものでございます。確かに、実際に高松はこんなに良いところであると

言葉で聞かせてもらったり、あるいは大人が押し付ける形で子どもたちに伝えたのでは、逆に反発する可能性がありまして、実際に自分たちがいろいろな人たちと会話をしながら、「高松はこんなに良いところだったんだ」ということを知っていくことは、非常に意味のあることかと思っております。そういう形で、この外国人観光客お助け隊の活動をさらに高校生や中学生とも一緒になっていただくという形ででも、事業を展開していくことができたらと思っているところでございます。御相談しながら進めていければと思います。

「「高松から世界へ」本当は身近なパラリンピックの世界」については、もともとは「高松を障がい者スポーツのメッカに！」という名称でございましたが、御存知のとおり、屋島レクザムフィールドはバリアフリー化を進めており、昨年度には「第２９回日本パラ陸上競技選手権大会」もここで行われたということでございます。そういう意味で、障がい者スポーツが高松でにわかに活発になってきたということでございます。プレゼンの中にもございましたが、来年はいよいよ東京２０２０パラリンピック競技大会ということでございまして、御紹介にもありましたように、高松は台湾を相手国としていわゆるパラリンピックの共生社会ホストタウンとして登録されておりますし、台湾のパラ陸上選手の事前合宿地にもなっているということでございます。そのパラリンピックを盛り上げるために、地元のパラアスリートや競技について広報たかまつで連載して紹介しながら、いろいろとみんなで関わったりすることで、市全体で競技そのものや雰囲気を盛り上げていきたいということかと思います。なかなか、広報たかまつの普通のページの中でやってみることも難しいと思います。別冊みたいな扱いをするのも一つですし、質問の中でもありましたように、効果を少しでも広げるために印刷物だけでなく、いろんな媒体のものをもう少し考えられたらと思っております。いずれにしましても、来年のパラリンピックを契機としまして、障がい者スポーツのメッカを目指して、障がい者スポーツの理解と推進を図っていきたいと思いますので、何らかの形で、趣旨に沿った事業化ができるように検討を進めたいと思います。

それから、「工芸×島の食」というものと「伝統的工芸品の広報物づくり」の御提案があったところでございます。高松には、それほど大規模な伝統工芸品の地場産業があるわけではございませんが、御紹介いただきましたように、漆器、盆栽、庵治石、あるいは、提灯、のり染め、菓子木型といった独特な工芸品もあるわけでございます。先ほど、私も質問させていただきましたが、特に外国人に受けがいいのではないかと思っておりますが、その辺りの十分な活用や見せ方ができていないという問題意識は私も一緒でございまして、その辺りを瀬戸芸に合

わせて島の食と絡めようということと、広告物としてインスタグラムなどで発信していこうという御提案でございます。ぜひ進めていきたいと考えており、お話でもありました「たかまつ工芸ウィーク」は、今年度は、市の事業として実施していくということでございますので、この事業の中で御提案のあったものを取り入れながらやっていきたいと思います。また、最近、高松空港の関係者をお話することがあり、「ＹＯＳＯＲＡ」という高松空港直営の商業施設が最近できまして、そこの中に香川の工芸品といった形で販売されているようですが、見せ方が上手いのか商品が良いのか、漆器のものは飛ぶように売れているということでございます。その次に品切れになったものは、庵治石ガラスの商品のようです。そのように工芸品を空港にも置くことで、外国人観客を始め、高松の伝統工芸品を発信することができますので、そういうところの実情報もお聞きしながら伝統工芸品の振興に努めてまいりたいと思います。

最後に、「文化施設×ソーシャルインクルージョン」のアイデアでございますが、ソーシャルインクルージョン、社会的包摂ということでございまして、私も昔から耳にしておりますが、なんとなくイメージを掴みかねているところで、今、盛んにＳＤＧｓということがいわれていますが、それと同じような趣旨だと思うのですね。ＳＤＧｓのテーマというのが「世界中の誰一人取り残さない」というものですので、そういう意味で、今、文化施設が単館でそれぞれバラバラにいろいろな活動をやっていると、社会的な全体のいろいろな人が連なるような形での事業展開になっていないという問題意識から発案いただいたものだと思います。私が最初にこのソーシャルインクルージョンという言葉を聞いたのは、平田オリザさんの講演でございまして、芸術文化というのは何のためにあるかというと社会的包摂のためにあるのだと、そのためにコンサートや演劇などのときに必ず一定の割合の席については、障がい者の皆さんや生活困窮者の皆さんといった方々のために分け与えられるべきだと、そういう人たちに参加していただくことによって、生きる力といったものを増幅させることになるのだと、そういったことに文化芸術は資するようにするべきだということなので、まさに文化施設をそのために活用するということも趣旨も同じかと思っております。まずは、職員の研修が大事だと思っておりますので、研修の充実に取り組んでまいりたいと思います。

以上、御提案いただきました、６つのアイデアがそれぞれ、本市の行政課題につながるものでございますし、いろいろと先を見通していただいた上で、良いアイデアをいただいたものと思っております。高松市が創造都市づくりを進めていく上で「３つの指向」というものがありまして、「独創指向」、「未来指向」、

「世界指向」ということでございます。それぞれのアイデアにつきましても、非常にユニークで独創的な、将来を見据えたものでありますし、国際的な観点を持ったものも多かったです。そういう意味でも、創造都市づくりに非常に役に立つアイデアをいただいたと思っております。改めまして、発表いただいた５人の方に敬意と感謝を申しあげ、今後も、創造都市づくりに御理解と御支援をよろしくお願いいたしまして、私の講評とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【副会長】
　それでは、議題（１）は以上となりますので、市長、両副市長、関係課の皆様は御退室となります。遅い時間にもかかわらず、御参加いただきありがとうございました。

（関係者退室）

３　議題（２）第２次高松市創造都市推進ビジョン策定後の取組状況について

【副会長】
　それでは、議題（２）に進みます。まずは、事務局から資料の説明をお願いしたいと思います。

（事務局から資料１について説明）

【副会長】
　それでは、只今の御説明につきまして、何か御意見等ありますか。

（御意見等特になし）

【副会長】
　御意見などは特にないようですので、以上で議題（２）を終了します。それでは、閉会に移りたいと思います。

４　閉会
（事務局から事務連絡後、閉会）